

たかなべ
追 憶

ふるさとを伝える会
高鍋町教育委員会

はじめに

高鍋町教育委員会では、高鍋町のボランティアグループ「ふるさとを伝える会」のみなさんのご熱意によって「たかなべむかしばなし」を第一集から第三集まで発刊し、高鍋地方に伝わる「むかしばなし」として数多くの方々に読み親しんでいただきました。その後、第四集として第二次世界大戦中・戦後にしほり個人の体験を収めました。第五集「たかなべの風俗・風習」で高鍋地方に伝わる風俗・風習について各地に伝えられた貴重な資料をまとめ、次の世代へ伝えて戴いたことは意義あることであつたと存じます。

本年度は第四集として発刊しました「戦中・戦後の体験集」の他に記録として残して欲しいという要望に応えるために、戦前・戦中・戦後の生活のようすと家庭（家族）を中心にどのようなように過ごしてきたか、その時代の移り変わりをまとめて戴きました。内容も外地での生活や町内の様々な懐かしい思い出も数多く収集されており、

大変なご苦勞があつたのだと今更のように痛感します。
ここに第六集を刊行するにあたり資料をご提供戴きました方々、編集に携わって戴いた方々、社会教育課の各位に心から感謝申し上げます。今後のご活躍をご期待いたします。

平成七年三月

高鍋町教育委員会

教育長 岩 永 高德

目次

ひもじかった体験……………	原 重隆	1	中国縦断作戦は苦勞の限界……………	河野 愛二	31
井戸 いかわ の通夜……………	水口トシ子	2	御苦勞さま「亀の湯」……………	尾崎 テツ	36
ふるさと……………	巽 望洋	3	思い出……………	能勢 正盛	38
過ぎ去りし日の思い出……………	友草スミ子	6	戦後の台風の思い出……………	永友タヅル	41
私の幼い頃の思い出……………	日高マサエ	7	昔の瓦の下……………	前田 寅雄	42
朝鮮から引揚げて……………	米山 久	8	私の歩んだことなど……………	大峰 實	42
人生希望我が道を行く……………	河野 博宣	12	狐のいたずら……………	永友 藤雄	44
青木の森に鎮座されるお地藏さん……………	野村 政雄	15	嫁女がほしい……………	永友 藤雄	45
六十年前の私共の町……………	紙谷 シマ	16	茅ふきの里……………	林 ッタエ	46
清き流れのままに……………	猪股 松雄	17	若き青春時代の思い出……………	柿原 繁樹	48
御稻荷様の由来……………	菊地富久子	18	大正時代のくらしの一端……………	松岡 美也	49
コックリさん遊び……………	上村テル子	20	思い出……………	矢野 文代	51
民主選挙のはじまり……………	岩佐 政雄	21	戦前の盆踊りの思い出……………	西村 満	53
お国に捧げた青春……………	田村 克豊	22	遠き日の想い出に……………	中村フジ子	56
渡鮮……………	三嶋 敏	24	将棋の思い出……………	末澤 高夫	58
小丸川の釣り懷古……………	一廣 長正	26	小丸鉄橋（昭和二十年頃）……………	黒木 畝松	59
小丸川改修前の思い出……………	中村 博	29	ある盆踊り口説……………	三浦 千賀	61
			そばぐり……………	坂本 理一	62
			水汲み田の思い出……………	吉松ハナ子	64

○	後世に残す心の財産……………	辻	直子	66
○	恩師を見送って……………	中村	博	68
○	下宿……………	原	郁	69
○	ふる里の追憶……………	原	亥一	73
○	デジョゴシデ 大将軍池の思い出 (鯰釣り) ……	原	誠	76
○	荷馬車引き……………	西村	満	78
○	宿の坂の今昔……………	野村	政雄	85

ひもじかった体験

竹鳩 原 重隆

昭和十九年十月中支より復員し留守隊の石川県金沢の無線通信部隊で十月三十日十時召集解除となり、金沢の駅の周辺で食べ物を探したが何一つとして食う物はなく十一時に汽車に乗りましたが、汽車は超満員で便所の中まですき間のないありさまでした。軍隊では定時に食事をするのが習慣で夕方になるにつれ無性にひもじさが増して、あちらこちらで食事をする様子を見るのがつらく眠ったふりをして目をしてしていた。食事も殆んどの人がからいも食でありましたが、前の席に腰掛けていた人がからいもの皮をむいて新聞紙につつま腰掛けの下に捨てたのを見て人が眠るのを待って拾って食べようかと考えたがいやしくも軍服に軍帽をかぶっている日本軍人としてはずかしい事も



出来ず、いつしか汽車は米子駅に着いたが夜中であり思いついたのが汽車の車掌を尋ねることが出来実情を話しお願いしたところ親切な車掌さんで何処まで帰るのですかと聞かれ「日豊線で高鍋駅まで」というと、「それはお気の毒ですが、何を

する事も出来ません。明日十時過ぎに門司駅につくので三番ホームの階段で待って居りなさい駅弁当屋さんに連絡するから」との事で急に元気ができました。しかし半信半疑ながら、門司駅に着き、指示された場所で待つこと十五分ぐらいでしたが、その待ち長かったことはたいへんでした。そのうちに中年の女性の方が近寄って「高鍋に帰る兵隊さんはあなたでしょうか」と聞かれ「車掌さんから頼まれたので此方へどうぞ」と案内され小室に入り、「ここでお食べなさい」と駅弁当を有難く涙が出ました。一つ食べ終わるとまた一ついただき、二つも食ってお金を支払ってお礼を言ってしまうと、同じつれの方がいるのではないかと三個もいただき再び車上の人となる。汽車の中で困っている方に無償で分けてあげ喜ばれました。私も生まれて初めての貴重な体験でした。金はあるても物のない時代で当時旅行する時は食糧を

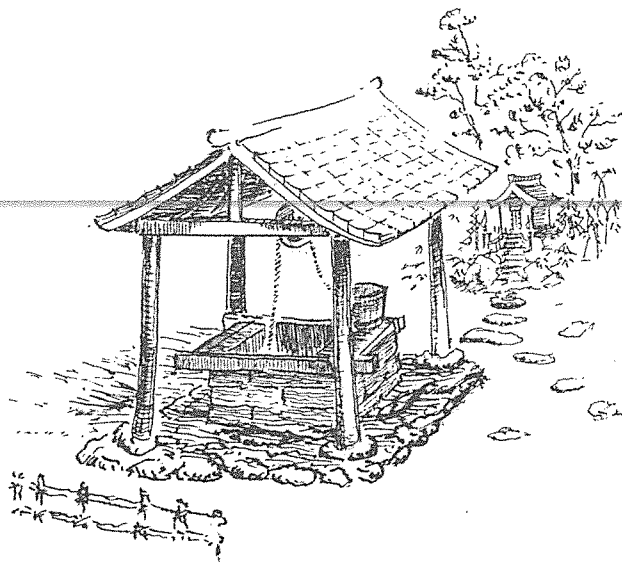
持参せねばならず、宿泊する時は米を持って行かねば宿泊は出来ない食糧配給時代でした。

井戸いかわの通夜

蚊口西の二 水口 トシ子

昔は井戸が班内に一ヶ所ぐらいしかなく共同で十四、五件の人が炊事洗濯風呂水までまかかっていました。朝夕はタンゴ（木で作った入れもの）を両肩にかついで流しの横にすえた「はんずかめ」に一ぱい汲おきをして水は大事に使っていました。井戸の脇に水神さまを祀って旧暦十三日には井川の通夜と言ってローソクを灯しお酒をお供えして立派な水が湧きますように又涸れることのないようにとお祈りをしていました。当番の人が班内をめぐり、「今夜は井戸の通夜に（めつてく

りやり) 参って下さい」とふれ廻り、案内を受け
た家族は今夜は早う仕舞わんといかんね「オオキ
ニ、オオキニ、ありがとう。」とねぎらいの言葉
をかけて下さる。



でした。高鍋町蚊口は特に空襲がひどかった戦後
の区画整理で道路幅が広くなり、又生活も豊にな

お茶受け
はそれぞれ
持寄りでし
た。大人も
子供も一緒
になってお
茶を飲みな
がら、おそ
くまで世間
話に花が咲
きにぎやか

り各家庭に井戸を掘る家がふえて今では使ってお
りません。当時の井戸は蚊口西の一杉田さんの宅
地に残っており、祀っておられます。懐かしい想
い出として今でも私の心に残っております。

ふるさと

中尾 巽 望 洋

「故郷は遠きにありて想ふなり」

故郷この言葉は生まれ育った処を離れて居る処で
使う言葉の様に思う、幸い私には十歳になるまで
育ち遊んだ故郷とも言ふべき処がある。

処は本町や木城町を流れている小丸川の源流で
椎葉村で字名は中山、尾崎、梅尾と云う処で小学
校も四年生を終えるまでこの地に育てられて来た。
小丸川は本町の河口に当たり木城町を縦断し東

郷町を洗いその上は南郷村今は有名になった百済の里を潤おし、その上流は椎葉村となっている。

故郷尾崎を過ぎれば大河内越えとなる。小丸川の分水嶺を越えればすべての水は一ツ瀬川の流れとなる。私が生まれたのは山の中の一軒屋でしかも家といっても丸太を柱に無造作に組んだあばら屋で産婆も近くに居ず、父がとり上げる始末。四才位まで住んだその記憶もあり、目の前を小丸川が流れ、伯父さん達と魚釣りしたり、泳いだりした思い出がある。

父は製炭業を営み、山を転々として居を変へ、窯を築き堀立小屋を建て、木を切り出し焼いていた。焼いた木炭は白炭と言って良質の木炭で薄を編んだ「だつ」といった米を入れる俵のこと。この「だつ」に入れ俵作して木札をそえ索道で川向いの道に渡し、南郷村の炭問屋に売っていた。山小屋の一軒屋だけに村の子供達と遊ぶことは小学

校に行くまで一度もなく弟と二人で遊んだ。時に伯父が近くで炭を焼いていた時は一人息子の従兄弟



と三人で遊ぶ

こともあった

が、村の子供

と遊ぶことは

一度もなかった。

四才か五

才の頃だと思

う、女の子の

頭の毛の長い

のを見て、

「あの子の頭

の毛は長いね、

おかしい

ね。」といったとか皆さん信じられますか、高鍋あたりで蚊帳を釣って寝て居た頃、当時上穂北村

原無田のもう一人の伯父の処へ遊びに行った時、高鍋で知人の家に泊り、朝目がさめ蚊帳の中に居ることに気付き出口が無いと泣きわめいたとか。

山の尾崎では涼しいためか蚊帳無しで過ごせたのだらう。最後の尾崎では四年生まで居た処。春は川向いには広い野原があり、村の人々は日を定めてわらび、ぜんまい狩り、我々は他所有者故に加わることはできなかった。夏は父が下を流れる小川へ釣りや溜まりに泳ぐあぶらめを手拭いですくったり、小学校の泳ぎの練習の時溺れた時のことは水底で真暗になった思いとともに忘れることが出来ない出来事だった。

秋は栗拾い、当時この地は山栗の産地でかます吠で出荷していたと云う。また、この地にあけびが熟れて甘くとても食べ切れるものでなく、モロブタに入れて重ねたものだ又自生の椎茸があり、乾かしたり、食卓にあがったものだ。庭先の山柿が熟

れ、吊し柿にしたり、熟柿を食べたりした。冬は雪はさほどなかったが一度三十糎以上積り休校となったこと等庭先のやぶに罌をかけると見ている目の前で山どりがかかること、しばしば、五、六羽連れであたかも庭でにわとりが遊んでいるようだった。四年生の頃と思う「昭和六年」学校で授業中轟音に先生共々校庭に飛び出し見上ぐれば三機複葉機またたく間に高い山にかくれてしまった初めて見る飛行機だった。

今から約二十年前かの地を出て約四十年振りに両親と兄弟等と子供十四、五名でキャンプをした。その時の両親の喜び様は、小魚を孫等と釣ったり、はじめてのキャンプにとっても楽しかったそうだった。私はその後秋祭り、夜神楽、小学校の閉校と訪れている。私には第二の故郷になる高鍋、すでに六十有余年少年の頃、青年そして、今はいまわしく過ぎた戦中戦後の混乱経済成長バブル停滞と

時は過ぎて行く故郷はその人々の心に描かれた絵であり、心であると思う。

過ぎ去りし日の思い出

下屋敷 友草 スミ子

思いおこせば昭和二十年三月桜の花の咲くころのこと実弟の軍隊入隊の門出に親子四人で行き、その帰りのことです。杉安をあとにして山角橋を渡り、茶臼原を通り、牛牧の集会場らしき建物の前までたどりつきました。そこには、うすピンク色の桜の花が満開で、まぶしいほどでした。桜の木の下には、トラックに乗った兵隊さんが、桜の枝を折っていました。私は、あまりにもきれいな枝だったので「その枝を一枝下さい」と申しますと、兵隊さんは快く一枝を下さいました。彼は

「この花が散る時は、僕もいっしょに散るのです。」と言われ、そのことばに心が痛みました。



一枝を手にも黒谷坂にさしかかった頃空襲に逢いました。私たちは、山の中に身をかくししばらくし

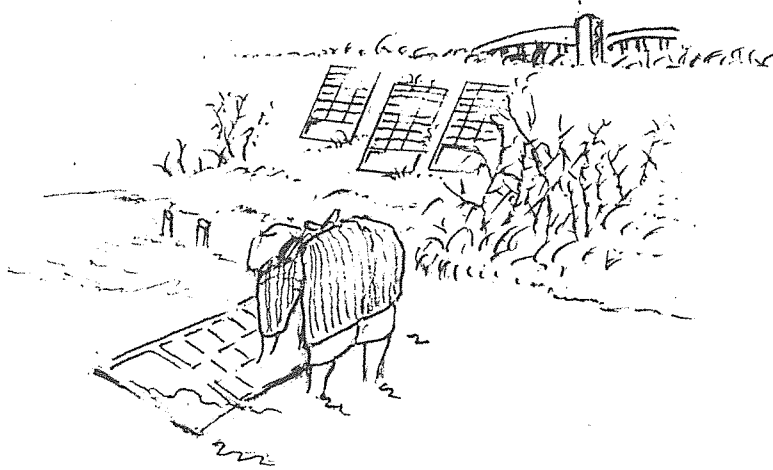
て解除になり、山より出てみると私の手には、一枝のサカキを握っているではありませんか。何とも言えぬ気持ちで子供達を自転車に乗せとぼとぼ足を運んでいるうちに、高鍋の町が眼下にあらわれ、蚊口の方向が爆撃の為に焼けこげていました。心が冷たくなるのを感じた遠い遠い昔の思い出ですが時折、軍人さんとのこの時の一コマが忘れられません。いまでも、合掌したくなる思い出です。現在の平和がいつまでも続きますように、そしてこの平和を大切にしたい思いがいっぱいです。

私の幼い頃の思い出

蚊口西一 日 高 マサエ

私の子供の頃に今の宮田川鯨橋の下から天神橋の下の清流で友達とシジミ取りに出かけると、二

つ目を明けてますので指先で面白く取っていました。又だくまえびがいるのであみを持って取り、水が増すと夏等せんたく板を持ち出して泳いでおりました。



正月前には障子洗いにも川を利用する事が多くて、楽しい思い出がたくさんあります。終戦後の宮田川は、汚染により、足を入れることさへ出来ない有様です。ああ昔の川が懐かしい、もう一度だけで

もいいからシジミが見られ、子供たちが川で遊べる様になったらと、願いたいものです。夏祭りになると、町の検番から芸者さんが馬車に乗り「イヤホー」と太鼓をたたいて大山さん所は地主さんの様な金持ちで踊っていたのでついて廻っていました。

又車のない時代駅前と四つ角に人力車が止まっていた町の伯父さん所に行く時よくのって行きました。病院には、自家用の人力車があり車夫さんがいて先生が往診に見えていました。又蚊口と言う所は、昔から蚊が多く夕方になると庭に青葉を燃やして蚊退治、今の様に蚊取線香があるはずもなく、夜は蚊帳を四すみに引張って朝起きると妹達と二人でたたむのが一仕事でした。

暮になると餅をついたのをお年重と云って親類へ二つ重ねて、タオルを供えて母の言いつけで配っていました。私達は、ビロードの足袋や下駄

お歳暮にもらうのが嬉しく床の間に、いっぱい並べていたのを、覚えています。又浜の松林今の児童公園が昔の松林で、その庭に秋になると雨が降った後に、初茸松露等、きのこが松葉の下にかくれていて誰が先に取りに行くかを競争していました。ソーメンナバと言って一個所にかたまってはえている事も有り、今だに忘れる事が出来ません。自然が段々と無くなり今の子供たちに取って、何が楽しみでしょうか、私達の子供の時代物はなくとも幸せで一杯でした。二度と味あう事の出来ない思い出が走馬燈の様に過ぎていきます。

朝鮮から引揚げて

黒谷 米山 久

私自身驚きと感謝の日々を送っています。なん

と今年八月で満九十六才になってしまいました。

明治三十一年（一八九八年）岡山県玉島町に生まれ十才の時家族と朝鮮釜山府に移住し、両親は砂糖の商いをはじめました。私はどうしても玉島女学校に行きたくて一人で船に乗り受験しました。

バイオリン、お琴を習いつつ二キロの道を白足袋、高下駄で通います。校門の前には毎日下駄屋さんに来て下駄の歯をすげ替えてくれました。

帰るとコテもアイロンもないので袴をきちんとたたんで布団の下に置いて寝敷をし、汚れた白足袋を洗う毎日でした。体操の時は、着物におこし姿なので生理中にはT字帯から落ちはしないかとヒヤヒヤしたものです。成績は上位で卒業出来、無試験で奈良高師に行くことを先生に何度もすすめられました。が両親の了解得られず釜山へ戻り、二十二才の時に横浜出身の主人と（後に朝鮮総会督府官吏、昭和五十四年死亡）結婚しました。

当時は外地加算が多く高給で、裕福な生活でした。三百坪の宅地に七十坪の家を建て、五人の子供に恵まれこれ以上の優雅な生活はないと思うほどでした。しかし栄枯盛衰は世の常、私達は敗戦により土地、財産のすべてを失い、持てるだけの荷物を持って引揚船で帰ってきました。家族バラバラで帰国したため全員揃うのに半年近くかかりました。岡山へ引揚げの途中、原爆投下で焼けてしまった広島で汽車が止まり駅前で飯盒でごはんを炊いて食べたりもしました。一斗缶入りの油を娘と二人で棒でさげて歩くうちに山道で日が暮れ途方にくれていたところ老女の一人暮らしの家の灯を見つけ、不躰ながら一夜の宿を頼みました。翌朝は見ず知らずの私共のためにおかゆを作って頂きました。親切は今も忘れません。住所も名前も聞かず出発したので後悔していますが、この親切が戦後の私共に生きる勇気を与えてくれ、どんな

困難にも打ちかつ源になりました。それ以来多勢の人の助けやばげまして今日があるのです。

釜山では将校
さんが何人も我
家に投宿されて
いました中に川
南出身の宇都宮
様が居られ、そ
のお世話で高鍋
町石原に家を求
められました。が、
当時は職にもつ
けず、茶臼原で
入植する事にし
ました。

毎日暗いうちから四キロの道を通い、土と汗にまみれて手には血豆を作り大きな大きな松の木を



伐り根を掘り起こし、荒れ地を開墾し十年かけて三町五反の畑を作りました。この開拓時代の苦労は筆舌につくしがたく、五十年後の今日では懐かしい思い出になりました。この苦労があったればこそ長生きしているのかも知れません。

引揚げた時、長男は農林省水産大二年でした。長女と三女は都城高看に相次いで進学、次女は、釜山の女学校を卒業していて、次男は高鍋高校卒業後、共に農業を手伝ってくれて大助かりでした。学資を作るために持って帰ったミシンを使い。白生地とほどこいた帯の芯で足袋を何足も縫って売りました。着物もほとんど売り払い質屋通いも度々でした。今考えると自分でもよくやれたものだなあと思います。現在五人とも健在で、よき家族に恵まれ、やさしく身に余る親孝行をしてくれてこれ以上の幸はないと思います。

昭和三十二年に次男とみかん経営に着手、三町

五反に順次植え付け経営は順調に推移しましたが六十三年自由化の影響で国の助成を頂き全面廃園に踏み切りました。次男は現在第二の職場を県公園協会に求め六年になります。

平成四年町の不燃物処理場建設に協力し宅地と農地の一部を提供しました。小並を離れるのは、断腸の思いでした。入植当時から苦楽を共にし、親戚同様に暖かい心でお付き合いお世話して頂いて多くの皆様にお別れするのは釜山から引揚げるときと同じ様な辛さでした。そして黒谷に家を買いました。新しい地区の生活は不安もありましたが近所の方々をはじめ地区の皆様も親切で良い所に来たと思っています。

七十五才で宮崎の村上三弦道で三味線を習いはじめ、八十五才の時文化祭で弾かせて頂いたのも思い出の一つです。指先と頭を使い呆けない様にと氣を使っています。

大好きなプロ野球のスコア付けを二十年近くしています。九月に宮日新聞に取り上げて頂いたのがきっかけになり、十月にMRTラジオにも出して頂きました。又よい思い出が増えました。

八時頃に朝食、その後新聞読み二時間、重要なものは切り抜き、日記、家計簿をつけ、深呼吸、背筋伸ばし、軽い体操で足踏み、手や肩まわし、手作りのおじゃみで遊び、塩水の嗽をかかさず、野球、相撲などスポーツは何でも好きでテレビを見たり、城跡の堀端の散策で一日はすぐに過ぎます。今までで一番うれしく有難かったのは、三十九年に主人が県の代表として東京へ行き農林省で経営の実績発表したことです。私も県の係の方と一緒にに行かせてもらい、宮城や東京のあちらこちらを見物できたことです。

私には八人の孫と十四人の曾孫がいます。孫の中では一番若い次男の内孫（高鍋高校―水産大―

宮崎工専）が宮崎日産勤務で昨年結婚しました。お嫁さんは高校の同期生でとても家庭的でやさしい保母さんです。九十五才で結婚式にでました。

亡父の恩給は私の自由で孫達の入学や結婚する時に使い喜ばれています。

次男の嫁とは結婚以来ずっと一緒に三十四年になります。食事も私を主にして好きな料理をしてくれ有難く思っています。

私は明治、大正、昭和、平成の四代を経て、十九世紀末から、二十世紀と生きてきましたが二十一世紀まで生きていられると三世紀を生きることになるので、嫁は「どうしても二十一世紀まで長生きして下さい。」と常々言ってくれます。それが嫁の生き甲斐みたいなので自愛して生きるのが私のつとめになりそうです。

人生希望我が道を行く

大正通り 河野博宣

佐世保第二海兵团へ、佐志水第三九五六号。昭和十七年五月一日、四等水兵、八月十日、三等水兵、佐世保防備隊付、第八長門丸乗船、十一月一日、一等水兵、十八年十月六日第十三根據地隊司令部付、第一海兵团搬入団佐世保防備隊、十八年十月二十二日、馬公発戦務甲、十一月一日上等水兵、十九年五月一日水兵長、十九年三月八日侍従武官御差遣御文八煙草下賜し二十年五月一日普通善行章付与、任海軍二等兵曹、九月一日任海軍一等兵曹二十一年一月十日は第十三根警備隊付、十三根司、五月九日、第十三根據地隊、司令部付、十三警、六月六日、盤谷発、若鷹便乗、十三根司、六月十九日浦賀着十三根司、六月二十四日予備攻編入復員以上。

当時編成概要記述します。元海軍佐世保第十三根據地隊司令部編成、第一回司令官以下千二百名余り、内地出港、昭和十八年十一月三日シンガポール港寄港す私熱病へ陸軍病院入院回復しビルマ国ラングーンへ向かう。第一回編成部印度洋上にて敵潜水艦にて撃沈される全員戦死す。司令官より聞く、内田氏光田氏生き残り、第二、三回にて司令部編成す。其の後昼夜毎日の空爆に合いラング市死守の命有り。其の後転進以上後記へ

昭和十七年五月入団以来について申し述べます。先に記しました。四等水兵となり三ヶ月教育訓練を終わり、三等水兵の命を受けまして、佐世保防備隊長門丸へ乗船いたしました。其の後実習訓練を受けるため、上海航路の監視につきました。悪天候が一番苦闘の毎日でしたが、諸々の諸訓練に当たっては今日夢の様です。時の経つのも早く、あっと思う日頃でした。悪天候の中マスト上にて、

一番困ったことは、胸つかえの警戒のときでした。それも一ヶ月、二ヶ月と経つうちには、風雨や波高しでもなれて参りました。その時は沓下を準備して警戒についた事も有りました。余りゆれると外にもらした事も有り、旧兵の注意を受けて、罪を受けた事もありましたよ、激しい罪は、ソバの延べ棒とか、ロープを水につけておくとそれは堅くなりましてね、おまけにハシにむすびめが有りました、それが廻りつくとか大変いたく感じました。身のひきしまる思いでした。ときにはオシッコの出る時もある位でした。今でもお尻にはキズあとに残っている位です。新兵、旧兵、下士官といわずやられましたね、今思えばなつかしい位ですよ。はげしい程身におぼえがありますね。その様な勤務が六ヶ月続き、南方方面の船団護衛の航海勤務、その時台湾沖喜ザン島四マイルにて大阪商船が魚雷を受け、水中柱が上がり汽笛と同時に火の海と

果し、船体垂直に水没船体の姿もなく火の海でした。付近一体を爆雷攻撃を数時間した。商船には兵隊、軍属、看護婦の皆さんが南方方面に向かう途中でアッと言う間の戦いでした。その後キールンに入港し、帰路の途中台風に会い西表島に停泊し二泊の寄港で佐世保へ帰港しました。第十三根據地隊司令部付き命令があり、何にも分からないまま第一海兵団佐世保防備隊に集合し、行く先不明のままの航海で、十一月三日に着いた所はシンガポール港で、初めて分かりました。ビルマ、ラングーンへの命を受けましたが、すでに急病デング熱におかされ陸軍病院へ、回復し士官三名、兵三名にて向かい、第十二警備兵舎へ、さっそく司令官のところへ行き、司令官より「河野良かったよお前の戦友は印度洋で全滅だと聞かされ暗い思いで、其の後勤務へ、十九年二月頃より陸海空状況悪化、グラマン機、B二十九爆撃機の襲来、昼

夜と毎日の空爆でした。その後、昭和二十年三月頃には、ビルマ軍が反乱を起こし、ラングーン部隊も慌ただしくなった。ラングーン転進の命にて陸上は森部隊の指揮下、海上は田中十三根指揮下転進せよの命をうけ、途中ブROOM街道にて印度国境のアキヤブス、第十三警備隊本陣へ迎視に司令官と同行いたし状況を視察し、其の後ラングーンへ帰隊いたし、間もなく状況悪くなり、毎日毎日が戦闘でした。ラングーン攻撃を英軍に備えて陸戦闘機を編成し第十三警備隊と第十二警備隊で、司令河野大佐の下に三百名余りの編成、ビルマ方面軍は陸においては森部隊の指揮下に入り転進せよとの命令を受け、四月二十三日には、ペグ方面展開中、陸海軍独立混成旅団と共に転進中でした。ビルマ軍を主体とするゲリラ軍が反乱を起こしました。五月二十七日海軍記念日には大変な戦闘でした。此の時の河野大佐は戦死され、シッター川

渡河前にて英軍の攻撃によりほとんど戦死しました。シタン平原横断にては、ビルマ国のチャンダラボーズ一族も見受けました。亦内地日本人の方も多数おられました。転進中なのでどうすることも出来ず、其の場限りでした。昭和二十年八月八日を最後にビルマ方面軍連合陸戦部隊第十三根據地隊司令隊員一同は、ビルマの土と化しました。思えば三ヶ月余りの悲痛なビルマ戦闘も今は亡き戦友の冥福をお祈りするのみです。

一、旅の世も、過ぎしいくとせ、返りみる
一、思い出も、一夜過ごせど、声もなし

一、有りし日の、遠く近くに、南方の

一、青空に、夜もまぶしく、十字星

一、星空に、肩にかかりし、椰子零

南方ビルマ国ラング部隊、元海軍奮戦記

復員者、第十三根據地隊司令部、第一回編成

司令官 山口県 田中頼三

参謀 熊本県 左座 弘

軍医長 熊本県 上原 梓

副官 東京都 多田 一男

電信長 熊本県 江藤重俊

衣糧長 香川県 前田友市

下士官 宮崎県 河野博宣

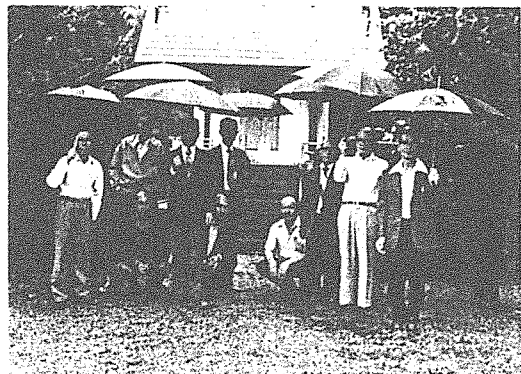
” 福岡県 内田光政

” 香川県 光田 一

青木の森に鎮座されるお地藏さん

青木 野村 政雄

戦前戦後迄は結婚式にはお地藏さんの多忙な時が有りました。お地藏さんを花嫁に抱かせるという生婚家に居ずわるとか夫婦仲よくとか。昔の人はよくこんな知恵が出たものと思います。私は昭和



二十一年十二月に妻をもらったのです。結婚式後酒の宴最中に地区の青年二人が、ほほかぶりして地蔵さんをかかえて座に上り妻に抱かせてくれたのです。酒宴の座では大拍手があり大喜びです。その後又別の青年が地蔵さんを抱かせてくれたのです。青年諸君には酒肴で労をねぎらいました。その夜は地蔵さんも家で一夜をあかしてもらい次の日は地蔵さんを返すのに一苦労。一体の地蔵さんを返したかももう一体の地蔵さんはどこにと心配した。ところが二体とも同じ所との事、やっと地蔵さんを元の座にお返しする事が出来たのです。現在では地蔵さんの出番は全くなく二体仲よく森の中に鎮座されて居られる。地区民の末永く幸あれと。

六十年前の私共の町

南町 紙谷 シマ

私達の町は高鍋町下町と申していました。その頃皆信仰に厚く町内で春は、日置の水神様に御水いただきに御参りしてかえりは御店で皆んなで御神酒上げて皆いい気分です。秋は比木神社に収穫の御礼参り皆で同じように御参りしたもんです。

それから旧三月二十一日は、御大師様の御参りを四月二十九日の天長節も一同が集まって酒さかなでごちそうを作り、町内皆でにぎやかに一時を過ごしたものです。今その人たちも何人かのこって居られるだけ、なつかしい話になってしまいました。

それから代参と言って鶴戸神社と宇納間地ぞう様に御参りに行くのにお金がかかるので頼母子講